琉球大学学術リポジトリ

琉球国時代の和文・漢文を活用した教材開発：「伝統的な言語文化」への興味・関心を広げる授業の試み

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2018-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西岡, 華穂子, Nishioka, Kahoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41628

琉球国時代の和文・漢文を活用した教材開発

―「伝統的な言語文化」への興味・関心を広げる授業の試み―

Development Research of Teaching Materials Using Classical Japanese and Chinese Writing in the Ryukyu Kingdom : An Attempt of Lesson to Broaden Students' Interest and Concern for Traditional Linguistic Culture

西岡華穂子
Kahoko　Nishioka

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・沖縄県立西原高等学校

1．はじめに

（1）現状

現行の高等学校学習指導要領（平成21年3月告示）に［伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項］が登場した。続く高等学校学習指導要領解説国語編に「『伝統的な言語文化への興味・関心を広げる』ためには，古文と漢文だけでなく，古典に関連する近代以降の文章や，伝統芸能，年中行事など，多様な方面からアプローチすることが大切である」（文部科学省，2010）と，教科書に所載されていない題材を教材として活用することが一つの方法として示された。これより前から米田・松田（2008）は，越中（富山県）にかかわる万葉集歌を題材にした古典教材の開発を通して地域教材の有用性を指摘している。沖縄県にもその素材となり得る琉球国時代に記された和文・漢文の文献が残されているため，地域教材の開発は可能であるが，高等学校の国語教育実践の場では，それらを活用した実践は広まっていない。

高木（1996）は，郷土教材を授業化する理由の一つに「教科書教材が生徒の実感からかけ離れていて，興味・関心をもって取り組み難くなっている」ことを挙げている。学習への取り組みにくさは，特に教材と学習者との間に時間的・空間的な隔たりがある題材を取り扱う古典学習では，多かれ少なかれ避けられない問題ではあるが，教科書に所載される古典教材の舞台とは異なる気候帯に属する沖縄県では，この問題はより深刻である。教材の舞台との気候の違いが大きいことも原因となって，教材に描かれる自然の事物についてさえイメージを持つことが難しい生徒たちが多く存在するのである。教師も生徒も国語便覧等の資料に頼りながら，教師は厳しい冬を乗り越えた春の待ち遠しさや錦のように映る紅葉の美しさとそれを目にする感動を口頭で説明し，生徒は想像の世界で学習するという流れになる。

（2）目的

本実践においては，琉球国時代の和文・漢文を活用した教材を開発し，古典を読むための知識・技能の習得をおろそかにすることなく，実感を伴う郷土の伝統的な言語文化の学びを提案する。ここでいう実感を伴うとは，学習者が，その舞台を想像したり，描かれる事物に理解や親近感を持ったり，登場人物の行動や心情に共感したりすることと捉えておく。

（３）方法

①　科目の設定

生徒の実感を伴う学習の教材としては，平易で親しみやすい内容である方が望ましい。その点，琉球国時代の和文・漢文は，古文・漢文の基本に忠実な平易なレベルであることが多く，複雑な技巧もほとんど見られない。よって本実践で作成できる教材は現行の「国語総合」の範囲を越えないものと判断し，高校１年生の古典入門に代替できる教材を目指すこととした。「高等学校用教科書目録（平成 28 年度使用）」（文部科学省，2015）に掲載されている『国語総合』の古典編（23 冊）の教材構成をみると，古文では 22 冊が説話を，漢文では 23 冊すべてが故事を入門教材として載録している。説話や故事に共通する特徴として，分量が少なく一話完結であること，物語性があり内容の難易度が低いことなどが挙げられ，初学者向きだとみなされている。このことを踏まえて開発する教材を説話的な内容のものにすることにした。

②　教材の開発

教材を採る基本文献には琉球国の正史『中山世鑑』,『球陽』,『遺老説伝』を計画した。その理由としては，官製ゆえに琉球国の中でも相当の知識人の手に成ることから基本的知識・技能に信頼が置けること，古典学習の入門教材に適した説話的なエピソードが多く含まれることが挙げられる。教材化するにあたって，基本文献から原文・語注・読み下し文をデータ化し，適宜訓点を施して語注や解説を加えて体裁を整え，さらに口語訳を施した。また，生徒向けの学習課題ワーク等を作成した。昨年度開発した教材は，漢文が，『遺老説伝』から「お水取り」「眠い虫次良（にーぶいむしじらー）」「穏作根子（うさんしー）」「白銀堂伝説」,『球陽』から「始闢茶園于棚原山地（始めて茶園を棚原（たなばる）山地に闢（ひら）く）」，古文が『遺老説伝』の読み下し文を活用した「安里のテラ」と『中山世鑑』から「森川伝説」である。

③　検証の方法

本実践の狙いである生徒の興味・関心が広がったかどうかを検証するために，アンケートを利用して生徒の意識調査を実施する。また，単元ごとの１枚ポートフォリオの活用も取り入れる。

２．実践

（１）Ａ高校での実践

①　対象クラスについて

「課題発見実習Ⅱ」協力校の沖縄県宜野湾市内にある専門高校（Ａ高校）の３年生で卒業試験が終了した「現代文」選択者約 30 名。Ａ高校の教育課程では１年次の「国語総合」の中で古典を取り扱い，学習内容は説話と故事という入門期の学習だけで，２，３年次には教育課程に「古典」がない。また，授業の配当時間は２時間である。

②　教材について

開発した教材は，高校１年生を対象とした「国語総合」の教材だが，協力校の教育課程を考えた場合，３年生向けの授業内容とすることも可能と考えた。協力校が宜野湾市内にあることから，使用する教材を，宜野湾市森川が舞台となる察度王の出生に関わる「森川伝説」とした。

③　授業の実際

生徒が主体的に「読むこと」に参加できるような仕掛けを意識し，学習課題としては逐語訳を求めず，大意をつかんで物語の人物の心情を理解することを設定した。古典に不慣れな者にとっては教材がやや長いことから，場面に分けて読むエキスパート活動を取り入れ，知識構成型ジグソー法を用いた授業を実施した。第１時では，三つのグループに分かれてエキスパート活動をスムーズに進めることができた。２年次以降，授業では古典の学習がなかった生徒たちが，本文中の単語をたどりながらスムーズな口語訳となるように考えや意見，疑問を出し合う様子が見られ，最終的には，グループごとにあらすじをまとめることができた。第２時では，前半に前時に参加しなかった生徒に対してエキスパートのグループ内で教えながら第１時の振り返りをして，ジグソー法による新しいグループを編成し全体の大意をつかむ活動を行った。後半では，グループで話し合いながら心情を探る活動が想定よりも積極的に行われていた。古典の原文に返りながら場面を想定して意見を出し合う姿が見られ，生徒たちにとって「読むこと」について「現代文」と「古典」の垣根が低くなった場面だったと捉えた。まとめに全てのグループが登場人物の心情を自分たちの言葉で説明しながら発表することができた。

④　成果と課題

ⅰ　生徒のアンケートより

生徒の興味・関心の程度や授業への取り組み状況等について明らかにするため，授業に関するアンケートを実施した。その結果，「沖縄（琉球）が舞台だから興味が持てた」と答えた生徒が 94.7%，「沖縄（琉球）を舞台にした古典を教材に授業を行えば，古典の授業への興味・関心が高まる／どちらかというと高まる」と答えた生徒が 84.2%で，Ａ高校では生徒にとって身近な舞台を題材とした教材は，興味・関心を広げることに有効だったと考えられる（表１，２）。また，知識構成型ジグソー法による授業が生徒にとっては主体的・対話的な授業に感じられたようだった（表３）。

表１「森川伝説」を題材とした授業のアンケート結果①

沖縄（琉球）が舞台になっている古文の作品を読んで、どう感じましたか。

回答内容	回答数	割合%
A 沖縄（琉球）が舞台だから興味が持てた	18	94.7
B 沖縄（琉球）が舞台だけど興味が持てなかった	1	5.3
C 本土や中国が舞台の他の古典作品と変わらない	0	0
D その他	0	0

表２「森川伝説」を題材とした授業のアンケート結果②

沖縄（琉球）を舞台にした古典（古文・漢文）を題材に授業を行えば、古典の授業への興味・関心が高まると思いますか。

回答内容	回答数	割合%
A 高まる	6	31.6
B どちらかというと高まる	10	52.6
C 変わらない	3	15.8
D 低下する	0	0

表３「森川伝説」を題材とした授業のアンケート結果③

場面ごとに分かれて読んだあらずじを新しい班でまとめて、人物の心情を読み取る活動で、話し合いで人物の心情を想像することはできましたか。

回答内容	回答数	割合%
A 班のみんなが意見が出し合えた	18	94.7
B 一人の意見が強く、他の意見は出せなかった	1	5.3
C 雑談が多く、話し合えなかった	0	0.0
D その他	0	0.0

ⅱ　授業観察者からの助言等

観察者からいただいた成果としては，全体的には「生徒が　参加／集中　していた」，手法に関しては「学習課題とジグソー法が合致していた」，教材・内容に関しては「生徒が物語に入りやすい題材だった」「学習課題解決のため生徒がキーワードを本文に返って捉え直そうとしていた」とのご意見をいただき，概ね狙っていた形の授業を行うことができたと捉える。これらの要因としては，自分で作成し

た教材でもあり，教材研究が成功していたと言える。課題としては，「指導案にある評価（みとり）に改善が必要」と学習課題と評価の間の齟齬をご指摘いただいた。このことは本研究の実践に限らず，授業をする者の大きな課題として捉えておく。

（２）Ｂ高校での実践

①　対象クラスについて

沖縄県西原町内にある普通科高校（Ｂ高校）の１年生約 90 名。Ｂ高校は，進学に特化した教育課程を持つ「特別進学コース（２クラス）」，体育に特化した教育課程を持つ「健康科学コース（２クラス）」，柔軟な進路に対応する教育課程を持つ「文理コース（４クラス）」の８クラスで１学年が構成されている。また，健康科学コースと文理コースの授業では応用と標準の習熟度クラスを採用している。２クラス３展開授業で，どの授業も異なるクラスから半数ずつの生徒が合同で授業を受ける形態である。本実践での対象クラスは，健康科学コースの標準クラス１つと文理コースの標準クラス２つの３クラスである。

②　実践１

ⅰ　教材について

教材の舞台が西原町棚原集落であることから生徒に地域の教材ということを意識させやすいことに加えて，古典入門のまとめとして，音読・書き下し文・口語訳などの基礎的な学習の定着を図ることができそうだとの判断から，採用する教材を『球陽』より「始闢茶園于棚原山地（始めて茶園を棚原（たなばる）山地に闢（ひら）く）」とした。

ⅱ　授業の実際

開発した教材による高等学校の古典の学習を提案することで，琉球国時代の和文・漢文の文献が［伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項］の「伝統的な言語文化への興味・関心を広げる」素材として有効であることを示すこと，その授業方法として主体的・対話的で深い学びに近づける手法の活用を試みることを目標とした。実施にあたっては，生徒の主体的な活動を取り入れることを意識して計画し，本実践の授業を受けていない生徒に内容を伝えるという設定の課題を課し，古典を現代語に書き換える（リライト）活動を行った。

通常の古典学習のように，基本事項の学習や口語訳等に取り組んだが，知っている地名が漢文の中にあることを生徒達は新鮮に感じたようで，教室から棚原集落の方向を指さし，「あっちだ！」という発言が各クラスであった。書き換えの作業は３～４人のグループを生徒に任せて作

表４　書き換えの課題と注意点

教材	課題	条件	注意点
「棚原のお茶の話」	①向秀実が王様に宛てた呈文を書く。	・600字～800字で書くこと。 ・訴える内容や、訴えるに至った経緯などが分かるような手紙にする。	①現代語で書くこと。 ②本分の記述を元に書くこと。 ③発表は最大５分。 ④グループ全員が作品制作の役割を担うこと。 ⑤この授業を受けなかった人にも内容が伝わるように書くこと。
	②四コマ漫画×２以上	・2作品以上で内容をまとめる。 ・画用紙に書く。	
	③紙芝居	・画用紙に書く。	
	④新聞記事	・県産のお茶ができたことを伝える新聞記事。 ・Ａ４の用紙１枚にまとめる。	
	⑤向秀実のブログ	・グループの人数分以上の更新をする。 ・画用紙に書く。	
	⑥初めて県産のお茶を飲んだ人のLINEのやり取り	・初めて県産のお茶を飲んだ人が友達に勧める内容で書く。 ・グループの人が2回以上コメントを送ること。 ・画用紙にスマホの画面を書く。	

り，課題の形態を選択させて作業に取り組ませた（表４）。

iii　成果と課題

a　生徒のアンケートより

古典を読むための知識・技能の習得を確認するために，本実践を受けていないクラスと受けたクラスで，漢文訓読について同内容の質問をした。その結果，本実践を受けていないクラス（表５）と本実践を受けたクラス（表６）で，概ね満足と考えられるＡまたはＢと回答した割合に差異が認められないことから，開発した教材が基礎的な知識・技能を習得させる教材として活用できると判断した。

また，本実践を受けたクラスで作品のイメージについてアンケートを実施したところ，74.4%の生徒が作品の舞台を想像できたと回答し（表７），登場人物に対する共感を問う質問に対して「共感できた」という回答も 83.1%（表８）であることから，対象クラスの生徒に対しては「読むこと」の教材として受け入れられたと捉えた。

b　１枚ポートフォリオより

１枚ポートフォリオの生徒の学習後のコメントについては，Ａ～Ｅの５種類に分類し表９に示した。その結果，83.1%の生徒が肯定的なコメントをしていることから，開発した教材が学習の対象として受け入れられていることを確認できた。また，Ｂの沖縄の歴史や文化に関連するコメントまたはＣの情意面で肯定的なコメントをした生徒を「伝統的な言語文化」に対する興味・関心を学習前よりも広げたと判断し，44.6%の生徒がこの点で進歩を見せたと読み取った。

c　授業観察者からの助言等

リライト活動については，「現代っ子らしい表現ができている班もあり，充実した活動ができていた」「課題の内容が生徒に取り組みやすく，面白い」「生徒が楽しそうに参加できていた」というご意見をいただいた。活動の下準備として課題の形態に現代的な形のものを取り入れたり，思考ツールを活用して計画を立てさせたり

表５　漢文訓読の習得状況（教科書使用クラス）

「虎の威を借る」の学習を通して漢文訓読の方法に気をつけて音読ができるようになりましたか。

回答内容	人数	割合%
A　できた	51	25.4
B　まあまあできた	108	53.7
C　どちらともいえない	23	11.4
D　読めないところもあった	12	6.0
E　できない	7	3.5

表６　漢文訓読の習得状況（開発教材使用クラス）

「始開茶園干棚原山地」の学習を通して漢文訓読法に気をつけて音読ができるようになりましたか。

回答内容	人数	割合%
A　できた	31	40.3
B　まあまあできた	34	44.2
C　どちらともいえない	5	6.5
D　読めないところもあった	7	9.1
E　できない	0	0.0

表７　作品の舞台を想像できたか

「始開茶園干棚原山地」の舞台となった西原町棚原について「昔はこうだったんだ」というような昔の姿を自分なりに想像しましたか。

回答内容	人数	割合%
A　想像した	19	24.4
B　ある程度は想像した	39	50.0
C　どちらともいえない	17	21.8
D　想像しなかった	3	3.8

表８　登場人物への共感等

「始開茶園干棚原山地」で向秀実（しょうしゅうじつ）がお茶を植えた理由は共感、または納得できましたか。

回答内容	人数	割合%
A　できた	25	32.5
B　まあまあできた	39	50.6
C　どちらともいえない	10	13.0
D　できなかった	3	3.9

表９　OPP シートの授業後のコメント分類

	コメントの内容	人数	割合%	興味・関心%
A	教科・科目の知識・理解について肯定的なコメントがある	25	38.5	
B	沖縄の歴史や文化に関連するコメントがある	10	15.4	
C	情意面で肯定的なコメントがある	3	4.6	
A及びB		8	12.3	44.6
B及びC		5	7.7	
C及びA		3	4.6	
D	肯定的なコメントが読み取れない	5	7.7	
E	無記入	6	9.2	

したことが成果につながったと考える。生徒の成果物に関しては，事前に必要な要素の書き方と管理の仕方についての指導が不十分であったことが反省点である。また，発表のさせ方の工夫が必要とのご指摘を多々受け，アクティブ・ラーニングの視点に立った授業について研鑽が必要なことを課題として自覚した。

③　実践２

ⅰ　教材について

２学期に入り，描かれていることについて描写から読み取る学習をした芥川龍之介の「羅生門」の後の教材として，昔話の比べ読みを導入とすることができる「穏作根子（うさんしー）」（出典『遺老説伝』）を教材に授業を実施した。

ⅱ　授業の実際

作者の異なる『浦島太郎』の絵本３冊を読み比べて，それぞれの絵本が伝えようとすることを読み取り，対象とする年齢層を想定するという比べ読みを導入として行い，開発した漢文教材「穏作根子（うさんしー）」の学習を進めた。絵本の比べ読みの作業には知識構成型ジグソー法を取り入れた。教材文のテーマを「威部（いべ：聖所）の由来」としていたので，取り組む課題を「拝む」という行為についての作文としたかったが，生徒の信教の自由への配慮から，日常の中の拝む場面の例示を課すだけにとどめた。教材文の舞台は南風原町与那覇で，大きな商業施設の近くであることから，生徒は地理的な位置のイメージは持てたようである。

ⅲ　成果と課題

ａ　生徒アンケートより

訓読についての質問には，前述（２）の②実践１の「始闢茶園于棚原山地（始めて茶園を棚原（たなばる）山地に闢（ひら）く）」のアンケート回答と同様の割合が見られた（表 10）。また，書き下し文についての質問では，91,9％の生徒が「できた」と回答している（表 11）。これらから基礎的な知識・技能を習得させる教材として，生徒が達成感を持てるものとなっているといえる。教材の内容に興味・関心が持てたかを問うための質問には 70.2％の生徒が登場人物の墓を「見たい」と回答している。沖縄の交通事情を考えてＢの選択肢の「誰かに連れて行ってもらえるなら」という条件も興味がある回答と判断した（表 12）。昔話を導入にして漢文教材を学習し

表 10 漢文訓読の習得状況（「穏作根子」学習後）

「穏作根子（うさんしー）」の学習を通して漢文訓読法に気をつけて音読ができるようになりましたか。

回答内容	人数	割合％
A　できた	25	33.8
B　まあまあできた	38	51.4
C　どちらともいえない	6	8.1
D　読めないところもあった	3	4.1
E　できない	2	2.7

表 11 書き下し文の習得状況（「穏作根子」学習後）

「穏作根子（うさんしー）」の学習を通して書き下し文が書けるようになりましたか。

回答内容	人数	割合％
A　できた	25	33.8
B　まあまあできた	28	37.8
C　難しいがなんとかできた	15	20.3
D　どちらともいえない	5	6.8
E　できない	1	1.4

表 12　教材の内容への興味・関心

「穏作根子（うさんしー）」のお話で登場したお墓とされるものが現在でも南風原町にあります。見てみたいと思いますか？

回答内容	人数	割合％
A　ぜひ見てみたい	16	21.6
B　誰かに連れて行ってもらえるなら見てみたい	36	48.6
C　特に興味はない	18	24.3
D　見たくない	1	1.4
E　その他	3	4.1

表 13　昔話が題材の古典学習について

「穏作根子（うさんしー）」で学習したように昔話を古典の授業で読んで、どうでしたか。

回答内容	人数	割合％
A　おもしろかった	36	48.6
B　興味がわいた／他にもあるなら読んでみたいと思った	25	33.8
C　難しいので、いやだ	8	10.8
D　その他	5	6.8

ていった形については，82.4%の生徒が興味・関心を持ったことがうかがえ（表 13），古典への興味・関心を広げるための題材として説話を基本文献から採用した教材の開発は，有効だったと判断した。教材の舞台となっている地域では現在でも穏作根子（うさんしー）にまつわる場所を威部（いべ）として大事にしており，地元に伝わる昔話として「穏作根子（うさんしー）」を保存・継承するためにパンフレット等を作成しているので，授業の中でそれらを紹介したり，ゆかりの地とされる場所の戦前と現在の写真を比較したりして，古典の世界と現代とのつながりを強調することができたことは，地域教材を用いた成果として捉えている。自由記述の欄には古典学習への興味・関心を示すコメントや沖縄の古典に肯定的なコメント，さらには，沖縄について学ぶことに言及したコメントが寄せられ，生徒自身の中で教材と主体的に対話し，気づいた跡が見られることを成果としておく（表 14 及び表 15）。

表 14　「穏作根子」学習後のアンケートの自由記述欄の内容の分類（25 件中）

コメント内容	件数
A　古典の学習に関する否定的なコメント	1
B　この授業の感想	4
C「穏作根子」についての感想	2
D　沖縄について興味・関心を示すコメント	7
E　沖縄の古典についての肯定的なコメント	4
F　古典への興味・関心を示すコメント	5
G　知識・理解について肯定的なコメント	2

表 15　「穏作根子」学習後のアンケートの自由記述欄のコメント

・漢文を書き下し文にするのは意外と面白いことが分かった。
・漢文を読めるようになって，書き下し文を書けるようになって，古文がとても好きになりました。
・古典の学習は難しいけど，物語で読んでけっこう面白かったので他にも読んでみたいです。
・意外と古典おもしろい。
・古典は難しい。
・沖縄の話は難しいでも興味がわいた。
・個人的にはこのような授業を増やして欲しい。沖縄のことについてもっと知りたいし，意外におもしろかった。
・漢文だけじゃなくて，色々なことを学べた。

本実践では，主体的・対話的な学習を目指して，単元の導入の絵本の比べ読みで知識構成型ジグソー法を取り入れたが，経験したことのある生徒が非常に少なく，取り組み方から説明する必要があった。通常は生徒に任せたグループでの活動を行っているため，生徒にとってはいつもと勝手が違い，活動の前半は意見を出し合うことが難しく，授業者が各グループを巡回していくらか誘導的に話し合いを促すことになった。他者との対話を促す文化を教室に生む授業を課題として挙げておく。

b　授業観察者からの助言等

指導計画の「読む能力」の評価基準に挙げた「絵本の比較を通してそれぞれの絵本の伝える内容の違いに気づいている」について「知識・理解」の評価基準とするべきではないかと示唆を受けた。計画を練る段階で，学習者と学習課題，および評価の観点と評価基準について慎重に取り組むことを課題として心がけておく。「知識構成型ジグソー法を絵本の比べ読みの作業に活用していたのは適当だった」「知識構成型ジグソー法の説明が生徒にわかりやすかった」とのご意見があり，今後の授業改善の手立てとしてアクティブ・ラーニングの視点を持ちながら試行錯誤する励みになった。

表 16　開発教材の学習要素と『新編　国語総合』所載の教材の対応表

教材	句法・重要語・難読語等	「新編国語総合」（東京書籍）教科書所載教材
「お水取り」	・使役形 「令…～」 ハイフン「-」のつく読み方 ・十二支と方角 「即（すなはチ）」「申（しかシテ）」	「魏武捉刀」
「眠い虫次良」	・反語 「那（なんゾ）」 疑問 「何…哉（なんノ…や）」 「非（あらズ）」 ・「以（モッテ）」　奈（いかンセン）」「甚（はなはダ）」「雖（いえどモ）」	「魏武捉刀」 「論語」
「穏作根子」	・再読文字 「未（ダ）」 ・二重否定 「無…不（ズ）」 「反語 「何…可（ベシ）」 疑問 「何…」 禁止 「勿（ズ）」 「不如（しかず）」「見（まみユ）」「奈何（いかん）」「能（よク）」「何（いずクニ）」	「五十歩百歩」 「魏武捉刀」
「白銀堂伝説」	・禁止 「勿（なかレ）」 ・反語 「豈…乎」 限定 「焉耳」 ・「すなはち」の使い分け 「便」「乃」「即」「則」 ・「遍（あまネク）」「竟（ついニ）」「忽（たちまチ）」「而（しかシテ）」「各（おのおノ）」	「檄言」 「涼州詞」 「五十歩百歩」 「春夜喜雨」
「姑獲鳥園子棚原山坤」	・再読文字 「未（ダ）」 ・限定 「只…耳」 ハイフン「-」のつく読み方 ・置き字	「訓読の基本」 「五十歩百歩」 「華・工之優劣」
「安里のノラ」	・再読文字 「須（ベシ）」 ・「嘗（かつテ）」「恰（あたかモ）」	「訓読の基本」
「森川伝説」	・用言 助動詞 助詞 ・係り結びの法則	「古文学習のしるべ」

（３）開発した教材の学習要素について

開発した教材の基本的な知識・技能の習得のための学習要素を取り出し，前述（２）のＢ高校で採用されている『新編　国語総合』（東京書籍）所載の教材との対応表を付しておく（表 16）。

３．まとめ

琉球国時代の和文・漢文を活用した教材を開発し，古典を読むための知識・技能の習得をおろそかにすることなく，実感を伴う郷土の伝統的な言語文化の学びを提案することを目的に本実践を行ってきた。実践を振り返って，琉球国時代の和文・漢文は高校の入門期の古典教材として教科書所載の教材と代替できると言える。また，本実践を通して，米田・松田（2008）が「『地域教材』は学習者の日常に空間的に近いことが好条件となり，『古典に親しむ態度』の第一歩となりうる可能性が高い」と述べ，「古典指導における『地域教材』は古典に親しむ態度を養い，さらには，郷土を見直すという内容価値的な観点からも有益なものと判断できる」と指摘した地域教材の有用性を実感することができた。教材の内容について学習者が想像することで舞台や登場人物との対話が起きること，現代を生きる自分たちと登場人物との人間としての共通点を理解し共感することという，古典を学ぶ楽しみを，開発した教材の地域性が持つ利点を生かして伝える授業を目指し，今後は教材の完成度を高めたり，基本文献の幅を広げて教材の量を増やしたりすることが課題である。また，興味・関心を広げるにとどまらず，文学的な鑑賞にもつながる教材の開発・研究が必要である。本実践で開発した教材は，他教科との連携も考えられ，教科横断的な学習課題を設定できる可能性も持つ。また，現代の世界と古典の世界とのつながりを考える教材として，次期学習指導要領で登場する「言語文化（仮称）」の学びにもつなげることができる。本実践で取り入れたアクティブ・ラーニングの視点を意識した授業は，高校ではまだ試行錯誤が続いているが，一つの提案として現場の参考になれば幸いである。

４．文献

伊波普猷・東恩納寛惇・横山重（1962）『琉球史料叢書　第五』井上書房.
嘉手納宗徳（1978）『沖縄文化史料集成６　球陽外巻　遺老説伝』角川書店.
米田猛・松田明大（2008）「中学校国語科古典指導における『地域教材』の開発試論－教材『越中万葉』の開発と実践－」『富山大学人間発達科学部紀要』2(2)，pp.1-12.
球陽研究会（1974）『沖縄文化史料集成５　球陽　原文編』角川書店.
球陽研究会（1974）『沖縄文化史料集成５　球陽　読み下し編』角川書店.
文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』文部科学省.
文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説国語編』教育出版.
文部科学省（2015）『高等学校用教科書目録（平成 28 年度使用）』文部科学省.
高木功（1996）「郷土教材の開発と課題追及学習の展開」『国語科教育』（43），pp.29-33.